上田西高の教育

センバツ出場決定の報告を受けて歓喜する野球部員　（撮影 ２年２組 橋爪ここ菜）

第 65 号　2021. 3. 3発行

ページ

52億４千万キロメートルと１００ナノメートルと……理事長　水野一成　2
うえだ七夕文学賞、この六年……学校長　本美伊佐夫　4
オンライン授業への挑戦……教務主任　中村幸一　6
コロナ禍の学力保障～土曜補習のとりくみ～……進路指導係　松尾光国　7
生徒会活動
　生徒会この一年間を振り返って……生徒会主任　和田直樹　8
　新たな学校生活の土台を築いたオンライン生徒総会……生徒総会担当　山浦天　9
　コロナ禍で大きく変わった西高祭……西高祭実行委員会顧問　滝沢美穂　10
　クラスマッチを振り返って……体育委員会顧問　大塚雅也　11
コロナ禍の国際教育・英語教育……国際教育係主任　山口裕恵　12
長野県内修学旅行……二学年旅行係　平井進悟　14
校外学習
　コロナ禍における一学年校外学習の試み～身近な地域に目を向けて～……一学年旅行係　白井道彦　18
　コロナ禍を利用した校外学習……三学年校外学習係　森下暁　19
野球部の活躍……硬式野球部監督　吉﨑琢朗　22
自粛の中でのボランティア活動……ＪＲＣ部顧問　山浦さゆり　23
卓球部の活動……卓球部顧問　村上海　25
初担任を終えて……三年二組担任　土屋正明　27

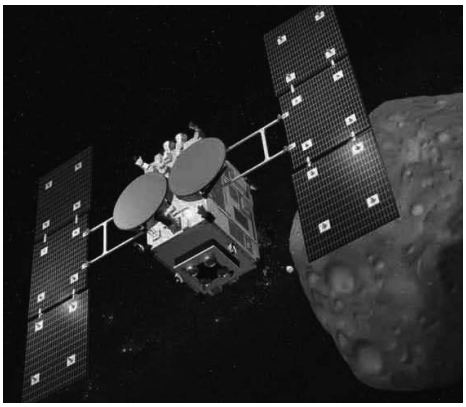
上田西高等学校

52億4千万キロメートルと100ナノメートルと

理事長　水野一成

まだ夜が明けきらない12月6日の朝でした。いつものようにNHKラジオを聴きながら散歩をしていると、日本の「はやぶさ2」が52億4千万キロメートル・6年間の長旅の末カプセルを分離し、そのカプセルが大気圏へ突入、計画通りオーストラリアの砂漠で無事回収されたというニュースが流れました。なかなか収まらない新型コロナウイルスの影響で、西高生の活動はどうなるのか、あれこれ思っていたところへ久しぶりの明るい出来事です。

初代「はやぶさ」が小惑星イトカワの微粒子を地球へ持ち帰り、日本中の話題になったのは確か2010年、上田西高校創立50周年の年でした。それからわずか10年で「2代目はやぶさ」は、倍以上離れた小惑星リュウグウから目標を大きく上回る量の物質の採取に成功し、カプセルを地球へ届け、更に先の小惑星へ向うという快挙を成し遂げました。小惑星にクレーターを作って、表面より深層から採取した試料は太陽の影響を受けていませんので、太陽系の成り立ちや生命の起源を探る大きな手掛かりになると言われています。今後の宇宙研究は飛躍的に前進することになるでしょう。



今年は上田西高校創立60周年の年です。子どもの頃から空と宇宙に少なからぬ興味を抱いてきた私は、「はやぶさ」「はやぶさ2」と西高の嬉しい偶然に心躍らせ、両者の10年後を大いに期待しているところです。信濃毎日新聞によれば、佐久市の臼田宇宙空間観測所が「はやぶさ2」と交信を続け、プロジェクトチームには長野市出身の方もおられるとのことでした。遠い宇宙の快挙を案外身近な方々が支えているのも嬉しいことです。

2020年は、新型コロナウイルスによって日常生活を大きく変えられてしまった年であり、楽しみにしていた東京オリンピックが延期になってしまった年でもあります。世界中の多くの医療従事者の方々や製薬研究の方々が、たった100ナノメートル程の微細な新型コロナウイルスと、今この瞬間も戦っておられます。一般の我々も西高生も皆、細心の注意や自粛が求められ、その影響に大変な想いをしています。しかしながら生徒諸君は、できないことを嘆くより、感染防止対策を充分に行い、できることに前向きに取り組んで前進しよう!と頑張っていました。上田西高校六十年誌の臼澤生徒会長の次の言葉は大変頼もしいものでした。

――当初は開催自体が危ぶまれた西高祭は校内祭だけの実施となりましたが、オンライン配信なども取り入れ、「この年でしかできない特別な西高祭」をつくりあげることを目標に、全校が一致団結して困難を乗り越えたからこそ大きな成果が得られました。皆が下を向きたくなるような状況であっても、それに負けずに前を向き、いま自分にできることは何かを考え、実行していくことの大切さを学びました。――

西高の各部・各団体のリーダーとご指導の全先生方の工夫と努力に心から敬意を表します。学園としましてもオンライン設備の充実や衛生設備の改善の他、様々な仕組みの見直しなど、ハード・ソフト両面で精一杯あと押しをして参りたいと思います。

これからも幾多の困難に出会うかもしれない若い生徒諸君は、この経験を糧にして、どんな時でも必ず前進の道があるということ、たとえ立ち止まっていても、目の前の出来事の有り難さ・面白さ・不思議さ・楽しさなどに気付けるように、学びを深め前進の力を蓄えてほしいと願っています。

さて、密を避けて信州の抜けるような青空の

高さと宇宙を感じるために、屋外で活動できる小さな提案をします。「はやぶさ2」の活躍を記念して小型ロケットを製作してみませんか？　従来からあったロケット型の玩具煙火ではなく、専用の黒色火薬エンジンの推進力で打ち上げ、降下時は機体に内蔵したパラシュートを噴出させて回収するので、繰り返し使用できるモデルロケットの製作です。なによりも安全に配慮し、紙製・木製（バルサ）、軽量プラスチック製のものです。全長20センチ25グラム程の小さなものから2メートルを超える大型のものまで、様々な種類のロケットの製作と打ち上げが全国で試されてきました。

　１９６０年代に宇宙工学のメッカ・アメリカで生まれたモデルロケットが日本に入ってきたのは１９９０年代のことです。日本モデルロケット協会によって、安全な打ち上げの普及推進のためのルールが整えられ、安全性と技術力を競う競技会が各地で開催されようになりました。中部大会はイチロー選手の母校・愛知工業大学名電高等学校で行われ、グランドの端にいくつも並んだ甲子園出場の記念碑が誠に印象的でした。全国大会は当時日本の宇宙開発の中心であったＮＡＳＤＡ（筑波宇宙センター）で開催され、日本中からロケット自慢の人達が集まり高度な技術を競いました。花火で有名な長岡の長岡技術科学大学・流体力学専攻グループの参加者達からは多くのことを教えてもらいました。一瞬の美しさを競う花火も、その製作と準備には高い技術力と多くの時間、そして何よりも熟練の経験が必要とのことでした。

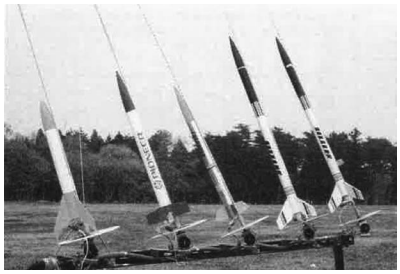
　モデルロケットは、打ち上げた後の安全な回収こそが判定の基準になりますから、打ち上げ地点の選定にもルールがあります。場所の清掃・整備も必要になります。立ち入り禁止区域の設定や上空の安全確認も必要です。消防との連絡や火薬類取扱い免許が必要な場合もあります。しかしながら、だからこそ安全のために一つ一つ課題をクリアして、目標を達成していくやりがいが生まれます。

　現在はＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）の共催で、毎年全国大会が開催されており、昨年パリで行われた世界大会には東京の高校生が参加したようでした。競技として楽しむ場合は、とくに機体製作技術や管理技術、打ち上げ技術など総合的な技術が求められ、競技は三種目行われます。

○【定点着地競技】
同じ発射地点から所定の高度に打ち上げた後、パラシュートを開いたり、ストリーマーをなびかせて降下させ、定められた地点にどれだけ近く着地させるかを競います

○【高度競技】
同出力のエンジンでより高い到達高度を競います

○【滞空時間競技】
打ち上げから着地までロケットが空中にある時間の長さを競います



更に【滞空時間競技】は三部門に分かれており
①降下時にパラシュートを使用するパラシュート滞空競技
②降下時にストリーマーを使用するストリーマー滞空競技
③降下時にグライダーのように翼を広げ滑空旋回して飛行時間を長く保つ
　グライダー滞空競技（これが最も高い技術力を要求されます）

　どの種目も着地時に機体が破損したり回収できなかった場合は失格ですから、ロケットの形・重さ・バランスや、パラシュートの重さと大きさなどの工夫の他に、気象や安全の知識なども必要です。打ち上げを成功させ無事回収するのは、説明ほど簡単ではありませんが、簡単でないところがモデルロケットの一番の魅力と言えるでしょう。

　さあコロナ禍の青春をスマホの中から飛び出して、信州の青空に自作ロケットを打ち上げてみましょう！　そういうグループが西高にあれば、及ばずながら少々古い物ではありますが、資料や機材を提供したいと思います。西高の諸先生方も「密を避けてできる興味深い提案」をどうぞよろしくお願い致します。

うえだ七夕文学賞、この六年

学校長　本　美　伊佐夫

1．まえがき

上田女子短期大学との共催で行っております「うえだ七夕文学賞」も今年度で六回目となりました。この文学賞は平成二十七年に本校の桜井達雄前校長と上田女子短期大学の花岡勉広報室長の発案で始まりました。上田西高校の国語科は長年、現代国語の授業の一環として、東洋大学の「現代学生百人一首」や「伊藤園お～いお茶新俳句大賞」に短歌と俳句の作品を応募する指導を行ってきており、これまでに多数の生徒が入賞入選しています。「現代学生百人一首」では平成二十年度と二十九年度に学校特別賞を受賞していますし、令和元年には「お～いお茶新俳句大賞」で団体応募賞を受賞しました。また上田女子短期大学では毎年学内で「七夕文学賞」を開催し、学生に短歌、俳句、自由詩を募集して旧暦の七夕に表彰式を行っていました。

第一回うえだ七夕文学賞作品集の桜井校長の「まえがき」に「折角息づいてきている文学的な活動を両校の校内だけに留めておくのはもったいない。お互いに校外に出て地元の機運を盛り上げよう」という花岡室長の言葉が載っておりますが、高大連携の文化活動だけでなく、短歌、俳句等を通じて世代間交流を深めるとともに、文学賞により創作意欲を高め，詩情豊かな地元の上田市を日本や世界に発信するという地域貢献の面もあります。平成二十九年に長野県私学教育協会から地域貢献活動部門で上田西高校と上田女子短期大学は理事長表彰されています。

2．応募者・応募作品の推移

平成二十七年の四月から「うえだ七夕文学賞」の設立の準備が始まり、第一回の募集期間は六月中旬から七月下旬までで、広報活動も十分できない中での出発となりました。選考は短歌の部が東洋大学名誉教授の神田重幸先生、俳句の部が鎌倉虚子立子記念館代表の星野椿先生、自由詩の部が両校職員が行い、現在も継続しております。募集する作品のテーマは「七夕」「想い」「願い」「希望」「祈り」のほか自由テーマでも構いません。第一回は応募者が二、四五六人、作品が三、三六九でした。短歌・俳句・自由詩の部で中学生・高校生・大学生・一般のそれぞれで優秀賞・佳作・入選とその他に特別賞も個人と団体に設け、八月末に上田女子短期大学の北野講堂で表彰式を行いました。

第二回は「うえだ七夕文学賞」が周知されてきたため、応募人数と作品数が大幅に増えました。応募者が三、一三四人、作品が五、三八七でした。第二回から応募資格に「園児」が追加されたのと、賞・表彰において園児・小学生・中学生の部で市長賞・教育長賞・秀逸賞・入選、高校生。大学生・一般の部で優秀賞・秀逸賞・入選のように追加変更になりました。

第二回で特筆すべきは表彰式の前の異世代交流を目的とした「おおぞら詩歌（うた）流し」が始まったことです。これは風船に入賞作品の短冊をつけて空に揚げるというものですが、環境に配慮して長いひもをつけて揚げ、セレモニーが終了したら、回収しています。園児から年配の方まで幅広い年代の人が参加します。

第三回は海外からの応募もあり、応募人数も作品数も増えました。三、三八三人六、〇九五作品でした。ベルギーからは英語俳句の応募がありました。

第四回は応募人数は増えましたが、作品数は若干減少しました。応募者が三、五〇一人、作品が五、四九〇でした。オーストラリアからは短歌五人一二首、カンボジア・中国・ベルギーから俳句二五人四四句の応募があり、うえだ七夕文学賞が海外と繋がっていることをうれしく思いました。

第五回は順調に応募人数も作品数も増えました。応募者が四、〇四三人、作品が六、七二三で、第一回の二倍になりました。

第六回は新型コロナウイルス感染症の拡大のために、全国的に新学期の四月から五月までが臨時休校となり、六月からの授業再開となったためか、締め切りを約二ヶ月延ばし九月末までとしたために、応募人数が四、三三〇人、作品数が七、五四一と増加しましたが、残念ながら毎年上田女子短期大学北野講堂で行っていた授賞式も取りやめとなり、表彰状と副賞を郵送すること

にしました。

以上のように「うえだ七夕文学賞」の応募人数も作品数も年々順調に増えております。

3．詩歌の楽しさ、素晴しさ

第一回から入賞入選作品集を冊子にしておりますが、作品集を読ませていただくと本当に心が豊かになります。作者は様々な世代にわたりますが、作品を通じて作者の心情や作者を取り巻く状況を共有・共感することができます。第四回の作品集の「まえがき」にも書きましたが、詩歌には一気に人を感情の高みに引き上げる強い力があります。ことばやそのプレゼンテーションが精選されているためでしょうか。小説のような散文ではなかなかそうはいきません。これも例えるなら山登りのように一歩ずつ徐々に感動の場面までたどり着くのです。韻文・散文の表現形式上の優劣を言いたいのではありません。詩歌には読者を直にそれが持つ世界に引き込む強い力があるという特色を強調したいのです。

たとえば、第四回の自由詩小学生の部の、兵庫県の大恵朱実さんの「なかなおり」は、「おねがいします／おとうさんとおかあさんが／けんかしてる／わたしはかなしい／おねえちゃんもかなしい（中略）／けんかしたら「ごめんなさい」って／あやまるの／わたしがいっしょにあやまってあげる／だからなかなおりしてほしい」という詩ですが、父母が激しく口論している様子が鮮明に伝わってきますし、幼い子供たちの不安と悲しみ、そして家族への愛情が本当に切実に表現されています。冒頭の「おねがいします」が、父母の仲直りを心から望んでいる作者の切迫した心情を表しています。

また、C・Dルーイスは『詩を読む若き人々のために』において、赤茶けた銅貨をピカピカに磨くように、詩は「まるで奇跡としか思われないような仕かたで、味もそっけもないものに見えた単語にピカピカ光るつやをあたえる」と書いています。全くその通りで、第五回短歌の高校生部門の降幡のどかさんの「カラカラと二人の下駄が響く道慣れない距離の夏祭りかな」はとても素晴らしい作品であり、読む人の想像を掻き立ててくれます。付き合い始めて間もない二人が、夏の夕刻にお祭りに出かける途中なのでしょうか。「カラカラ」というオノマトペが、会話が途切れがちな気まずさと緊張を、そして、「慣れない距離」という語句が作者の初々しい恋心を鮮明に表しています。

なぜ詩歌を書くか、なぜ詩歌を読むかという問いに対する答えは、人さまざまでしょうが、答えの共通項として、「感情の浄化（カタルシス）」があると思います。自分の心の内面を作品にすることは、あたかも裸をさらすような一面もあります。それにもかかわらず詩歌をつくるのは、時々刻々と消え去ってゆく「大切な感情やことがら」を詩歌という形あるものに昇華してまとめ、残したいという願いがあるからでしょうし、使い古された「ことば」をピカピカに光らせてくれる作者の感性に、読む者は共感し感動します。

第六回はコロナ禍を反映した作品が目につきました。久御山中学校の向井優奈さんの短歌「梅雨のときやっとはじまる新学期二ヶ月分のワクワク胸に」には自宅学習の鬱屈とした気持ちと学校が再開し級友と会える喜びが伺い知れます。未曾有の新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの生活に多くの制約を課し、多大な損失がありましたが、そういった不自由な暮らしのなかでこそ、これまで空気のように当たり前に思っていた事柄のありがたみや、他人を思いやることの大切さなどを再認識できることが多々あったのではないでしょうか。横浜雙葉中学校の當麻華子さんの短歌「星空にコロナ収束祈りつつ何気ない日々なつかしく思う」にも端的に表現されています。

4．第七回うえだ七夕文学賞への応募のすすめ

第七回うえだ七夕文学賞の募集は、例年通りならば、「七夕」「想い」「願い」「希望」「祈り」を主なテーマに、短歌・俳句・自由詩の部で八月上旬が締め切りとなります。多くの皆さんが詩歌の創作活動を通じて、心を豊かにするチャレンジをすることを願っています。どんどん「うえだ七夕文学賞」に作品を応募しましょう。

オンライン授業への挑戦

教務主任　中村幸一

二月末に安倍元首相が全国一斉臨時休校の要請を発表し、その後緊急事態宣言の発令や延長があり五月末までの約三か月間、通常授業ができない状態が続きました。当初はプリントによる課題配布とベネッセのクラッシーを活用した学習指導を行ってきましたが、五月四日に緊急事態宣言の延長が五月三十一日までになったことを受け、本校独自のオンライン授業を開始することにしました。

オンライン授業は、「生徒の学びを止めない」（学びの機会の保障）、「生活リズムの確立」の二点を目標とし、先生と生徒、生徒と生徒がつながり、一緒に学習を進めている連帯感によって学びに対する気持ちを継続させ、また健康維持のためにも規則正しい生活を送り、休校明けにスムーズに学校生活に戻れるようにすることを意識して実施しました。

四月中は教務係で準備研修を重ね、教職員全員には五月七日、八日に研修会を行いました。オンライン授業に採用したのはマイクロソフトの「Ｔｅａｍｓ」です。本校は２０１３年に正式に「マイクロソフトＯｆｆｉｃｅ３６５」の契約を開始し運用してきました。そのため教職員と生徒全員のアカウントは既に準備が済んでおり、「Ｔｅａｍｓ」の導入は容易でした。しかしオンライン会議システムを本格的に活用するのは初めてでしたのでしっかりとした準備が必要でした。いきなり一斉にオンライン授業を開始するとトラブル発生が予想されましたので段階的に実施しました。

五月十一日（月）～十五日（金）は、オンライン授業試行期間として五教科の科目のみ行い五月十八日（月）～五月二十五日（月）に分散型中間考査を入れ、五月二十六日（火）からオンライン授業を本格実施しました。また通信状況にも配慮した時間割も作成し通信障害もほとんど起こりませんでした。

今回本校のメリットを最大限に生かせた点は、寮生についてです。寮生は教室に来て授業受け、その授業を自宅生にオンライン配信する環境が作れたという点です。約九十名の寮生は本校の敷地内にある寮か、すぐ近くの外部寮に住んでいます。わざわざオンラインで授業を受けるより三密に配慮し教室で生の授業を受講する方が様々な面でメリットがあります。生徒の反応も見ながら進めることができ概ね良い授業ができました。Ｏｆｆｉｃｅ３６５は管理画面があり、私と事務室のＩＣＴ担当が使用状況を常に監視できる環境にあり、問題が発生した場合はすぐに対処ができますが、予想されるトラブルを未然に防ぐという観点で生徒に対しては次の注意事項を徹底しました。

・スクリーンショットや授業の録画は禁止
・チャット機能は授業内での発言、教科担任の先生への質問のみで使用し、個人的なやり取りはしない

以上の注意事項を厳守させオンライン授業を行うことができました。保護者の方からは近隣の高校に先駆けていち早くオンライン授業を実施したことに対して高い評価をいただくことができました。また生徒のために先生方も一生懸命研修してくれたおかげで、いつ休校になっても学びを止めることなくオンライン授業ができる体制が整いました。

教員向けオンライン授業の様子

コロナ禍の学力保障
～土曜補習のとりくみ～

進路指導係　松尾光国

昨年度から猛威を振るう新型コロナウィルスの影響で、全国の教育機関は大きな影響を受けました。本校も例に違わず、四、五月の二か月間、休校措置をとることになりました。

大学入試センター試験から大学入学共通テストに切り替わる過渡期の受験を迎える三年生、クラス替えを経て進路に向けて具体的な一歩を踏み出す二年生、そして入学後初めての環境で高校生としての生活をスタートさせる一年生。いうまでもなく、全学年にとってこの二か月は極めて重要な時間であり、何よりもそこで身につけるべき学習に取り組む心構えと学力をいかに養成するのかということが、進路指導係としての喫緊の課題となりました。そのような背景を踏まえ、今年度の取り組みとして、土曜補習の最大限の拡充に注力してきました。

コースを問わず四年制大学への進学の機運が高まり、確かな学力の向上が一層求められている昨今、本校の特色ある取り組みのひとつとして、受験学力はもちろん、その枠に留まらず、入学後の講義・研究に資する学力の養成を目指し、土曜補習は実施されてきました。本来は、その意味で授業の枠に留まらず、応用的な学習や受験対策に特化した内容を扱う土曜補習ですが、今年度は二か月の休校期間で大きく後れをとることになった授業内容の習得を第一に考え、土曜補習をスタートさせることになりました。

具体的には、二学期に隔週で実施されていた土曜補習を、時期を六月実施に前倒しし、かつ毎週実施の形に切り替えました。

まず六月の土曜補習は、授業内容の定着に主眼を置き、原則として授業担当者による授業として位置づけました。そのうえで、七月以降は例年と同じく、受験対策や応用的な内容を扱う補習として学力の伸長に努めてきました。その甲斐あってか、内容、回数、質、量とも例年を上回るボリュームの学習活動を提供できたのではないかと感じています。また何よりも各教科担任から「例年と同じか、それを上回るところまで学習内容を深めることができたのではないか」との声が多く聞かれました。

休校期間中、「学びを止めない」という信念のもと、教務係の微に入り細にわたる配慮と計画に基づいてTeamsを活用したオンライン授業が実施されました。その取り組みとともに、補習として土曜日を活用し、対面授業を充実させてきたことが、相乗効果を生み出し、生徒の学力の定着、そして伸長につながるものと確信しております。

このような取り組みは、計画さえあれば実現可能なものというわけではありません。何よりもすべての教職員の熱意が必要とされます。それなくしては何事も成し遂げられないと感じています。今年度の土曜補習は、単に係主導の立案ではなく、各教科主任、各担任の意見も反映させながら、文字通り学校全体で取り組んだ補習になりました。それが先述した「例年と同じか、それを上回るところまで学習内容を深めることができたのではないか」という声に結実したのではないかと考えます。ご協力をいただいた全ての先生方への感謝をこの場を借りて申し上げたく思います。そして受講した全ての生徒が、素晴らしい桜を咲かすことを願ってやみません。

生徒会活動

生徒会この一年間を振り返って

生徒会主任　**和　田　直　樹**

本校では、生徒が主体的に活動する場として４つの領域を提供しています。生徒会活動は、その４つの領域の内の一つであります。仲間や地域の方々と活動を共にすることで貴重な「経験」が得られ、自分たちで企画を考えることで「企画力」が身につき、計画したことに沿って行動することで「集団を動かすための力」を高めることにつながっていきます。

今年度は、上田西高校が創立60周年を迎える記念すべき年であり、生徒会活動も生徒主体の新たな取り組みにチャレンジし、70周年に向けて新たな歴史を築き上げていく意気込みで発足しました。新生徒会が発足して最初に迎える学校行事が、３年生を送る会である予餞会になります。お世話になった３年生に在校生が感謝の気持ちを伝えるために生徒会役員が中心となって準備を進めていましたが、予餞会間近まで迫ったところで新型コロナウイルスの世界的流行が発生してしまいました。これにより予餞会は中止となり、３年生への感謝の気持ちを伝えきれずに約３か月間の休校や分散登校を余儀なくされ、その間に予定されていた生徒会行事は中止、もしくは延期となってしまいました。６月から登校再開となり、延期となっていた生徒総会を実施しました。この生徒総会が令和２年度生徒会役員の初行事となりました。例年だと体育館に全校が集まって開催するというのが慣例でしたが、三密を避けるためにオンライン生徒総会を行いました。この試みは初めてで、生徒総会が円滑に進むのか役員はもちろん、教職員含めて不安な気持ちがありましたが、滞りなく無事に実施することができました。このオンライン配信が前例となり、校内放送ＬＩＶＥ機能も増設されて、その後の西高祭やＲ３年生徒会役員選挙、クラスマッチなどの生徒会行事にいかされていくこととなりました。三密を避けるための手段ではありましたが、その反面、時代に即した新たな技術を手にすることに繋がりました。

西高祭においては、長引いた休校期間の影響で準備期間が不足していたので、約１か月の延期をいただきました。しかし、感染拡大防止の観点から一般公開は中止、制約を設けた校内祭の１日のみ開催ということになりました。西高祭は、生徒会行事の中で一番の成長の場であり、見せ場でもあります。例年通りという言葉が通用せず、感染拡大防止策を講じながらの実施でしたので、制約をしっかりと守らせながらも全校生徒が満足できる企画をどうつくり上げていくかが役員たちに求められたことでありました。あれもダメでこれもダメ。正直、大人でさえ滅入ってしまいそうな状況にも関わらず、様々なアイディアや工夫を凝らしながら企画を立案し、オンライン配信も活用しながら実行に移してくれました。生徒会太鼓の演奏も人前で行うのは初めてとは思えないパフォーマンスでした。「逆境に打ち勝つ」この言葉があてはまる西高祭だったと思います。また、この西高祭を通して、大きな負担がのしかかっている医療従事者支援のための募金活動も行われました。自分たちのことだけではなく、社会貢献をしていかなければいけないという姿勢がいつの間にか培われていて感銘しました。この活動は、上田市からも評価され、感謝状をいただきました。

このように、今年度の生徒会活動は、常に新型コロナウイルスと共にありました。しかし、この困難に立ち向かったからこそ、今の社会情勢にしっかりと目を向けて、自分たちにできることは何かを考え、実行する力を養うことに繋げることができたと思いますし、生徒会の成長にも繋げることができたと思います。今後、新型コロナウイルスによる影響がどうなっていくかはわかりませんが、その時その時の社会情勢を踏まえながら全校生徒が安心安全に、そして、毎日学校に行きたいと思えるような環境づくりに努め、生徒一人一人が主体性を持つ「生徒による生徒のための学校」の実現を目指していきたいと思います。そのような活動を通して、社会に適応できる力を身につけ、周囲を見渡せる豊かな人間性を養い、将来、社会に貢献しようとする人材を多く送り出していきたいです。

新たな学校生活の土台を築いたオンライン生徒総会

生徒総会担当　山浦　天

生徒総会の担当をして6年目となる。生徒会行事は毎年行われるものであるので「昨年と同じ」やり方をすればとりあえず行事そのものは無難にこなすことができる。しかし、自分の性格上「毎年同じ」というものは嫌なので歴代の統括にはいつもその年のその担当者にしかできないようなオリジナリティを求めてきた。通常生徒会役員が引継ぎをした11月から準備が始まり、だいたい年明けには次年度の4月に開催される生徒会行事についてはほぼ計画がなされている。今年度も実際にそのような形で進んでいたのだが、新型コロナウイルスの蔓延により、かなりの方向転換を迫られることになった。オリジナリティどころの話ではない。生徒総会自体が「密」を前提にしており、もし通常通りの生徒総会を実施するなら、抜本的な変更が必要であった。2月末から5月末までが休校であったため元々4月に実施予定であった行事はほぼすべてが開催できなくなった。生徒総会も実施されないかもしれないと考えていたのだが、延期してでも実施という方向性で進むことが決定し統括とともに準備がはじまった。

元々代が変わってから最初に新役員が仕切る行事が3月の予餞会であり、その経験を元に4月からの行事と最大行事の西高祭へつなげるのが例年の流れだ。しかし、予餞会を経験せずに4月の生徒会行事も軒並み開催できなかったために、新役員が最初に携わる大きな生徒会活動は「生徒総会」ということになった。

全校に向けて活動方針案を読み上げる生徒会役員

6月9日に生徒総会が開催されることが決定したのだが、当初は生徒会役員が各委員会等の活動目標等を話している様子をビデオ撮影し、それを電子黒板に投影することで生徒総会を進める計画であった。しかし開催5日前くらいに教務主任よりオンライン授業で活用されたMicrosoft「teams」を用いたリアルタイムでの生徒総会実施の打診が来た。ビデオで準備が進んでいた手前断ることもできたのだが、新しい取り組みとして話題性もあったため、急遽その提案通りリアルタイムでの生徒総会開催へと変更する決断をした。まずは議案書の作成から始めたのだが、これもペーパーレスの観点から、従来の全校すべてに印刷して配布するやり方からＰＤＦ化して「teams」上で共有するというやり方を採用した。また意見質問を事前に全校に募るのだが、これもMicrosoft「forms」を利用してオンラインを活用して募った。匿名機能も活用してより質問が出やすい工夫もした。

限られた時間の中であったができうる準備はすべて整えた状況で当日を迎えた。採決についても各クラスで行ったものをteamsのチャット機能を用いて本部に送信してもらい待機している役員でその数を数えるというやり方を採用した。従来の生徒総会の設計を0から組みなおすという取り組みは決して容易なことではなかったがほぼスケジュール通りに生徒総会を進めることができた。生徒からは「リハーサルでできていなかった部分が本番も改善されなかった」、「採決の人数確認にてこずった」などの反省の声が聞かれたが、だれも挑戦したことがないことに最後まで粘り強く取り組めたことは貴重な経験であったと思う。「必ずしもオンラインに縛られる必要はなかったかもしれない」という意見もあり、その点は次回以降に生かしていきたいと思う。今回の取り組みで「新たな学校生活の土台」を築くことができたと自負をしている。

電子黒板に映し出された生徒会役員による演説を聞く生徒の様子

コロナ禍で大きく変わった西高祭

西高祭実行委員会顧問　滝　沢　美　穂

第56回西高祭は例年と大きく変わったものとなった。7月開催を8月1日開催へ延期、日程も2日開催から1日開催へ縮小、一般公開は中止、後夜祭の中止、全校生徒が集まる企画は行わない、と今までに無い形での開催となった。その要因として一番に挙げなければならない事はやはり新型コロナウィルスの存在であろう。

私は前任の先生より顧問を引き継ぎ3月末より本格的に西高祭の運営に携わることとなった。この時点で3月初めに緊急事態宣言により休校、予餞会は中止、卒業式も3年生のみで行うなど、学校生活は新型コロナウィルスの影響をとても受けている状況であった。そんな中計画をしようにも先が全く見えなかったが、開催出来る前提でテーマや企画案など例年と同様7月開催に間に合うような日程で計画を練っていた。しかし4月になり再び休校が開始。いつ休校が終わるのかも分からず状況はより悪化していた。やがてオンライン授業・分散登校も始まったが、それでも通常の学校生活とは呼べず、文化祭自体開催できるかも分からなかった。その頃は学校に来られない生徒会役員と連絡を取り合いながら計画を立てる日々が続いた。通常の日課に戻った場合、分散登校が続いた場合、オンラインのみで文化祭を行う場合、中止の場合の代替行事等、様々な状況を予測していくつもの案を立てていたが、日々変化する状況に合わせることでその案たちはほとんど却下されていった。せっかく考えた案をすぐに却下されていく事は生徒たちにとって辛いことであったはずだ。そんな状況でもめげずにアイディアを出し続けてくれたのは、どうしたら安全な文化祭になるだろう、コロナ禍で大会等も中止している生徒たちに文化祭を通して少しでも楽しい気持ちなってほしい、などの「全校生徒が満足できる文化祭を作り上げたい。」という思いが強くあったからだと思う。この「生徒のための文化祭」という考え方は今年の西高祭運営において一番の軸になっていたと感じている。そして6月に入り分散登校も終わり徐々に通常の学校生活に戻ったことでようやく計画を固めていくことが出来た。

中庭ステージでの開祭式太鼓演奏の様子

制約も多く、計画まで時間のかかってしまった西高祭であったが、出来るだけ例年の西高祭に近づける工夫をした。文化部・クラス発表は換気を行い、人数制限を設けることにより体育館で見られるようにし、飲食物企画において調理は行えないが、個包装のされた既製品のみの販売を許可するなど、コロナ禍に対応した「三密」を回避し、衛生面・安全面の配慮をした計画を立てた。新しい西高祭が出来上がり、ルールの強化や徹底をする必要もあったため、西高祭説明動画を作成して全校での共有を図ったが説明不足の部分もあり混乱を招いてしまった場面もあった。徹底した準備や分かり易い資料作りを行う必要があったと反省している。

しかしこのような状況下でも新企画に挑戦することも出来た。中庭ステージの規模を拡大し、カラオケコンテストや男女装コンテストや有志団体によるダンス発表の実施や、前夜祭では校舎の壁に部活動の活躍をまとめた映像作品をプロジェクションマッピングするなど、例年には無い屋外を利用した企画も行うこともできた。この企画は参加している生徒も盛り上がっていたようで、今後の文化祭でも発展する可能性を大いに感じる企画を作り出せたように思う。

全体を通して、初めて尽くしで反省も多い文化祭ではあったが、大きなトラブルもなく、今年の西高祭は成功だったと個人的に思っている。生徒たちにとって、特に3年生にとって最後の文化祭であった訳だが、自分たちの理想の文化祭が出来なくて悔しい思いをしていただろうと思う。しかしこの状況下で出来ることを模索している姿は逞しくとても頼もしい姿であった。この大変な文化祭をやり遂

生徒会メンバー

げたという事実と、粘り強く挑戦し頑張った経験は生徒たちの大きな成長に繋がっているだろうと感じている。参加して充実感を感じてくれていたらとても嬉しい。

最後に、準備期間も少なく、制約の多いものになってしまった今年の西高祭へ、沢山の協力をしてくださった全校生徒の皆さんと教職員の皆さんには感謝をしてもしきれない。文化祭自体を中止にする学校も多い中、例年に出来るだけ近い形での開催をさせていただけたことは、生徒にとってかけがえのない機会になったと思う。この場を借りて深く感謝を申し上げる。

クラスマッチを振り返って

体育委員会顧問　大塚雅也

今年も肌寒い季節の中クラスマッチが行われた。クラスマッチ当日を迎えるにあたり、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により全校生徒が一斉に集まって競技や応援を行う事が困難だったため、例年行われていた運動会も中止とし、球技大会のみの開催となった。他校の情報なども参考にしながら生徒の安全を第一に考え、例年通りとはいかないゼロからのスタートをきった。県内ではクラスマッチを行わない学校もある中で本校では感染対策を十分行った上での実施が認められた。生徒にとってもこのようなコロナ禍でどのような形で開催することが望ましいか頭を抱えていた。感染対策として行った事は原則無観客試合。特別に準決勝に進出したクラスに限り応援可能という形で行った。応援ができない代わりに「teams」を使用して各会場からオンライン中継を行い、各自のスマートフォンでの観戦を可能にした。また、使用した道具の消毒や会場での手指の消毒、競技者以外のマスクの着用など高体連大会実施要項に沿った感染対策も徹底して行った。

「クラス全員で臨んだクラスマッチ」

クラスマッチでは毎年「生徒が主体となった運営を」ということをテーマに挙げている。本校でも、生徒が主体的に活動する場として4つのステージが設けられているが生徒会活動もそのうちの1つである。主体的に行う事で「失敗」もあるがその分貴重な「経験」も得られる。同時に学生でありながら責任を背負うことでリーダーシップも生まれ、人を動かす力も身に着けることができる。このような経験は学校生活において授業だけでは得ることのできない経験だ。例年体育委員会のみの運営であったが今年度はオンライン中継もあった為、生徒会役員の協力のもと企画立案がスタートした。コロナ禍での西高祭を経験した役員は例年以上に逞しく見えた。オンライン中継に関してもリスクがあるとわかっていながら挑戦する姿勢、新競技にドッジボールといった新たな取り組みも行った。まさに生徒が主体となった運営と言えるだろう。本番では途中、悪天候に見舞われアクシデントとなったが、無事全競技を終えることができた。もちろん全て計画通りとはならなかったが新しいことに挑戦した役員を私は評価したい。

続いて反省点と次年度への課題をあげていく。まず今回の大きな反省点として、ルールの徹底が曖昧であったということ。ドッジボールの審判や競技開始の遅れがあったクラスなど細かなルールが共有できていなかった。良かった点としては、一日球技大会ということもあり生徒の出場機会を確保することができた。ここ数年の課題でもあったが、球技大会の出場機会が少なくなっているのが現状だ。西高生にとってクラスマッチや西高祭は教育的効果が大きい行事でもあるため今後も改革が求められる。また、クラスマッチを通じて仲間の大切さやスポーツの素晴らしさを感じられる運営を今後も目指していきたい。

令和2年度はイレギュラーな年となったが生徒会役員の成長を強く感じる1年であった。今後も生徒会役員のさらなる活躍を期待している。

「練習の成果を発揮した３年７組」

コロナ禍の国際教育・英語教育

国際教育係主任　山口裕恵

コロナで失ったもの、得たもの

２０２０年３月に予定されていたオーストラリアとアメリカへの短期留学が新型コロナ感染症の拡大防止のため延期（のちに中止）となり、４月から始まった今年度は、結果的にセブ島短期留学、シンガポール修学旅行など海外渡航が含まれる行事はすべて中止され、受け入れるはずだった長期・短期の留学生なども一切来日できなくなった。海外留学や国際交流を楽しみに入学してきた生徒、準備してきた生徒たちに対しては本当に申し訳ない。１９９０年から30年以上継続して海外に生徒たちを送り続けてきた本校の国際教育にとって初めて経験する大きな障害。実際、十か月経った現在でもオーストラリアには小包一つ送ることができないほど、人も物も行き来が滞っているのである。いくら４本柱として「国際教育」の看板を掲げても、これほどの厳しい渡航制限のもとでは有名無実化してしまう。もちろん、グローバル化が加速していたところに突然の急ブレーキで世界中が大打撃を受けているのだから、一学校のレベルでできることは知れている。そもそも悪いのはウィルスであり、渡航制限は当然必要な手段であるため文句のつけようもない。そんな八方ふさがりのなか模索した本年度の国際教育、英語教育は、また、私たちにこのような状況がなければ得られなかったであろう新たな知見を授けてくれた。今回は、コロナ禍の国際教育、英語教育で生まれた副産物について記したい。

ＡＬＴとオンライン部活動

幸運なことに、今年度４月から私たちの学校には、新しく常駐ＡＬＴが二人着任した。南アフリカ出身のモンワ先生とオーストラリア出身のキャメロン先生だ。二人とも２５歳以下のデジタルネイティブ世代で、親しみやすいキャラクターだ。新入生を迎え一週間、さあ授業というときに三週間の一斉休校になったが、二人がいたおかげでＥＣＣでは休校初日から英語のライブ配信を行うことができた。

ライブ配信は生徒がスマートホンにＤｉｓｃｏｒｄというアプリをダウンロードし、ＥＣＣのアカウントを作ることから始まった。ライブでは双方向のコミュニケーションができたので、受け手もテキストや声で参加した。英語絵しりとりや早口言葉などのゲームや、リクエスト曲、質問コーナーなどを通してＡＬＴの人柄にも触れ、外出制限の中楽しい時間を過ごした。ライブ配信に慣れると一歩進んで、２～３人グループでのオンライン英会話レッスンを実施するようになった。英会話レッスンは１～３人の単位で、発言の機会を多くできることがメリットである。内容も英会話や英検対策、ゲームから自分たちで選んだ。２名のＡＬＴが同時進行で対応したので、２０人の生徒が順番に一回１時間ほどのレッスンを週に２～３回実施できた。通常登校だったらこのような個別レッスン時間を確保することは難しかったので、これは休校を利用し個人の英語力向上させる有意義な取り組みになった。この取り組みは５月の連休明けに、本校が本格的にオンライン授業を実施するまで継続した。参加した二十人強の生徒たちは「休校中の日々の唯一の楽しみだった」と言うほど楽しみながら学んでいた。ＡＬＴにとっても、生徒一人ひとりを知るいい機会となった。私たち顧問の毎日の仕事は、予定を管理し時間通り始められるよう、生徒に連絡を取ることだった。

年度初めに行ったオンライン部活動では、デジタルネイティブのＡＬＴ二人に助けられ、新たな教育に取り組むことができた。特にＤｉｓｃｏｒｄというアプリでは、話すことはもちろんテキスト共有しながら、その場で生徒が英作文を打ち込むことも可能であり、先生が送ったｇｉｆ画像を見て生徒が即時に英語で描写するゲームなど、やっていくうちにさまざまなオリジナル教材も生まれていった。オンラインでは、何をどのように使うことで、どんなことができるのか、その可能性に触れる貴重な機会となり、その後、一年生全員に対して行われた個別のオンライン英会話授業の実施につなげることができた。

コロナの副産物
英語力アップ大作戦　～思考力・判断力・表現力～

今年度からセンター試験が共通テストに変更され、内容では思考力・判断力・表現力も試されるようになる。このような流れの中、今年度は、今まで取り組めていなかった英語教育の改革を実施することができた。具体的には、二年生の英語表現の授業改革、ＩＣＴ利用、英検対策などである。この背景には、直接的、間接的にコロナの影響があった。

今年の二年生はコロナ禍でシンガポール修学旅行が実施できず、さらに休校の遅れを取り戻すため、本来授業内で実施されるはずのマンツーマン・オンライン英会話も実施できなくなってしまった。シンガポール修学旅行は、英語の実用経験から表現力を養い、異文化理解、多文化共生など、海外経験を元にして思考力・判断力を高めるねらいがあった。それができない今年でも、どうにか新しい入試スタイルに合わせた英語運用力アップを図りたいと考え、取り入れたのが英語ディベートである。

英語ディベート

英語ディベートは思考力・判断力・表現力の総合力としてＡｒｇｕｍｅｎｔ（論証）する力を問うもので、共通テストでも教室内ディベートを想定した場面が出題されることになっている。英語ディベートを扱うことは本校の授業でも新しくないが、二年生の進学コースの半数以上が参加する大規模なディベート大会を実施することは初めてだった。トピックは学研の「ロジカルスピーキング」のテキストから選び、各チーム賛成、反対の両方について準備した。幸い、英語科二名とＡＬＴ二名がローテーションで生徒を指導することができたので、ルールや方法などの共通認識を増やしながら、一緒に少しずつディベートを形にしていくことができた。また、生徒の様子を見ながら、ルールや方法の微調整を繰り返し、ステップ・バイ・ステップで本校生の実態に即した形に収めていくことができた。クラス対抗のディベート大会は予想以上に盛り上がり、意表を突いた答えに大笑いしたり、時には悔し涙もあったりで、感情を伴って使う生きた英語を話すことができたし、自分で考え判断し英語で表現する姿があった。３学期は証拠資料（エビデンス）を使用した本格的なディベートに挑戦したいと思っている。

ＩＣＴの活用　姉妹校とのオンラインセッション

コロナ対策でオンライン授業を導入したおかげで、校内のＩＣＴ環境が整備された。５月には生徒を含めたプラットフォームとしてＴＥＡＭＳが運用され、９月にはＩＣＴホールに、44台のタブレットが装備された。英語とＩＣＴは両方コミュニケーションツールであり相性が良い。タブレットを使用し、個別のリスニング対策ができるほか、オンラインで気軽に英語学習ゲームを取り入れることもできるようになった。今年度はＩＣＴの活用元年になったともいえる。

ＩＣＴの恩恵を最も感じたのは、オーストラリア姉妹校やアメリカ交流校とオンラインでつながったことだ。参加したのは今年短期留学を予定していた生徒を含むＥＣＣ部員の希望者で、オーストラリア姉妹校ＣＣＧＳと２回、アメリカの交流校ＣＵＰと１回行った。１回につき４０～５０分程度つなぎ、日本文化を紹介するクイズやコロナウィルスによる生活の変化についての情報交換など、全員が順番で現地の生徒や先生たちと話すことができた。生徒達も新しい体験に最初は緊張していたが、３回目にはとてもリラックスしてその場でさまざまな質問を考え発言していた。交流後、生徒達は「ノリが海外（雰囲気が明るく）で、留学した感じがした！」と声を弾ませていた。西高生の心の窓はコロナ禍でも海外に開いていると感じた。新しい交流だが、今後も誰でも気軽に参加できる国際交流の手段として発展させたい。

留学センターの新しい利用方法　～英検指導、英会話～

入試に英検などの４技能試験を取り入れる大学が増え、生徒からは個別の試験対策や指導の依頼が増えている。今まで「留学センター」は、主に海外留学生とＥＣＣが過ごす場所だったが、代わりに今年はたくさんの本校生が、英検指導や英会話の練習のために訪れるようになった。ＡＬＴ二名も含めて留学センターのスタッフ全員で、スピーキング、ライティング、リスニングの指導に積極的に関わってくれている。生徒達の中でも、「あそこに行けば英語をみてもらえる」ということが浸透してきたようで、英検前には授業で関わっていない生徒も気軽に顔を出している。あまりに人数が増えたので、英語科に相談し、二学期は土曜日にも英検対策講座を開いた。最終結果はまだ出ていないが、進学コースの生徒達の英検受験率・合格率が上がっていることは間違いない。留学生がいないことは寂しいが、今までと同じかそれ以上に留学センターは賑わっている。〝外〟に目を向けることが難しい今、〝中〟に目を向け、少しでも生徒達の助けになればと思っている。

まとめ

積み上げてきたものを形にする機会を奪われたり、好きなことが思い切りできなかったり、我慢の多い年でした。今までの生活で、希望すればほとんどのことはできて当たり前だと思っていたことに気づかされます。高校時代の貴重な一年間をこのように過ごした生徒達は、今は苦しいですが、乗り越えた時には、我慢強く寛容で耐性がある大人になることでしょう。学校にとっても、この困難な状況下で生まれた新しい取り組みが、より困難に強い学校を作っていけるよう、今できることを今できる形で行い、収束を迎えるときに無駄ではなかったと思える時間にしていきたいと思います。

長野県内修学旅行

二学年旅行係　平井進悟

はじめに

本年度の修学旅行は、当初予定されていたシンガポールではなく、目的地を長野県内へ限定し、クラス別に目的地が異なる旅行となりました。過去に例の無い今回の試みは、新型コロナウィルスの感染拡大に伴うものであり、予定されていた当初の計画から大幅な変更を余儀なくされたことによるものです。結果的に、このようなタイミングで計画から準備、実施に至るまでの過程を経験したことにより、高校生活における修学旅行の重要性を再認識することができたと感じています。

当初の計画

近年、発展が目覚ましいシンガポールは、各国からの注目も高く、人気の観光地となっています。衛生環境が良く、国内の治安情勢も安定しており、修学旅行の目的地として人気が高いのも、それらの理由が大きいと思われます。ここ数年、本校においてもシンガポールでの修学旅行が続いており、過去のアンケートの結果から、生徒たちや家庭から高い評価をいただいています。本校における修学旅行の目的でもある「国際交流・異文化体験・平和教育」についても、質の高い体験を可能にできる国でもありました。今年度は、これまでの実施経験も踏まえ、従来の出発地である成田・羽田の他に、中部国際空港も加えることで、生徒達への負担を軽減できるスケジュールを計画し、入念な下見も行ってきました。

新型コロナウィルス

年が明け、新型コロナウィルスの世界的流行に関するニュースを目にすることが多くなりました。日本国内では、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の一件以来、連日にわたり感染者に関するニュースが報道され、国内での関心が一気に高まりました。マスクや消毒液を求める家庭が急増し、どこのお店に行っても品薄の状態が続き、入手が困難な時期も経験しました。「すぐに沈静化するであろう…」と、私を含め多くの方々が考えていたのではないでしょうか。またたく間に感染は拡大していき、見込みの甘さを痛感いたしました。非常事態宣言の発令を契機に情勢は一変し、学校の臨時休校、行動範囲の制限など、日常の生活は感染対策を中心に考えるようになりました。

シンガポールから沖縄へ

緊急事態宣言以降、国内の情勢は改善の方向に向かっていきました。しかし、目的地であるシンガポールでの情勢は思わしくなく、当時は、国外への移動はしばらく困難な状態が続くと考えられていました。パスポートの取得をはじめ、実施の準備を進めてはいたものの、現実的な代案を考えなくてはならない時期を迎えていました。実施時期の延期や目的地の変更など、旅行会社をはじめ長野県教育委員会や県内の他校など、広い方面で情報を収集しました。概ね意見はまとまったものの、最終的な決定は各家庭の意見も参考にしたうえでという結論に至り、

一斉にアンケート調査を行いました。当然のように感染を心配する意見もいただきましたが、想像を上回るほどに多くの家庭より修学旅行の実施を希望する意見をいただきました。具体的には、国外が難しい状況であれば目的地を国内へと変更して欲しいという意見です。旅行会社との打ち合わせで、当時の日本の情勢も踏まえると、過去に修学旅行の経験もある「沖縄」への変更が可能であると判断し、準備を進めていました。

第二波の襲来と目的地の再変更

沖縄へと目的地を変更した以降も、情報収集は継続して取り組んでいました。県内の他校の中に、本校と同じく沖縄への修学旅行を予定していた学校があり、実施時期も本校より早かったことから、是非とも参考にさせていただきたいと考えていました。そのような最中、沖縄県で新型コロナウィルスの感染者が発生し、連日のように感染者が増えていく事態となりました。また、感染者の発生は各地へと拡大していき、この頃から「第二波」という言葉が飛び交うようになりました。この事態を受け、他校の沖縄修学旅行は中止となり、県内の高等学校において今年度の修学旅行を中止する学校も出てきていました。終息の見えない事態を受け、沖縄修学旅行の実施は困難であると判断いたしました。修学旅行を実施できる地域の調査を続けていくなかで、各都道府県における地元地域での修学旅行を実施する情報を入手しました。すでに、県内の複数の学校も実施を検討しており、目的地を「長野県内」へと変更し、計画の立て直しを図りました。

旅行期間中の感染予防対策

目的地は長野県内へと変更になりましたが、新型コロナウィルスの感染リスクが無くなったわけではありません。密閉・密集・密接の「三蜜」を回避するために、約三百人にものぼる生徒たちの分散を考えなくてはなりませんでした。従来の修学旅行のように、学年全体で一堂に会することができないため、共通の目的地を訪れる際は、日にちや時間帯をずらす必要があり、クラス別での行動が原則となりました。また、宿泊を伴う旅行に関しては、宿泊先での他の旅行者との接触や、生徒達へ目の届かない時間帯が増えることからも、万が一のリスクを考え回避することにしました。その代わりに、他校では日帰りで一日での実施が多いなか、日帰りではあるものの三日間の旅行期間を設けることで、多方面への移動が可能になったことや、一日当たりのスケジュールも過密にならないような日程で計画することができました。移動は、クラス単位でのバス移動とし、乗車中のマスク着用や乗車時の消毒を徹底するなど、バス内での対策が重要であると考えたことから、万全を喫するため旅行会社の添乗員の方にも同行いただくことにしました。生徒達には、出発するバスの乗車時に検温を行い、発熱が確認された場合は、旅行に参加できなくなることも承諾していただく必要がありました。このように、感染予防対策が概ねカタチになりましたので、この内容を生徒や家庭に伝える段階へなりました。

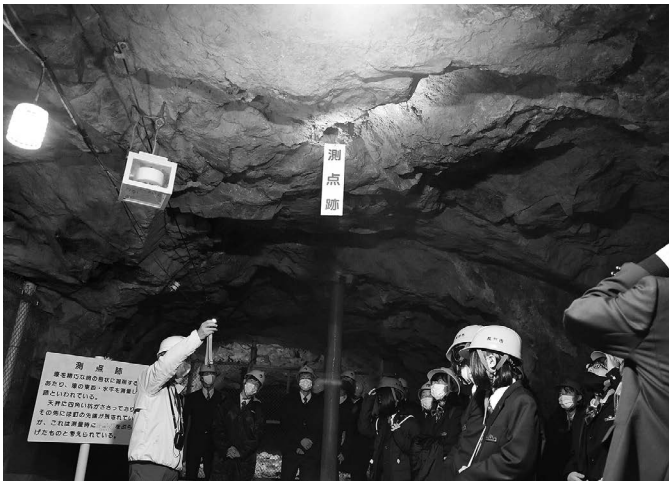
生徒たちの反応

沖縄から長野県内へと目的地が変わり、宿泊を伴わない旅行である旨の通知を配布いたしました。当然、落胆する生徒も見受けられましたが、思いのほか、修学旅行が中止にならないだけでも良かったと、安堵する生徒の方が多かったように感じました。また、保護者の方からは実施に対する心配の意見もありました。その一方で、実施に対する前向きな意見も多数寄せられ、

より行動範囲を広くするために、宿泊を伴う旅行にして欲しいとの意見も数多くいただきました。このような意見に学校も大きく後押しをしていただきました。しかし、心配に感じている家庭の意見を重く捉え、旅行計画の段階で少しでも安心していただくプランを提案し、一人でも多くの生徒に参加してもらえるよう、各クラス担任の先生方にも様々な面でご協力をいただきました。旅行会社からは、GOTOキャンペーンが修学旅行にも適用されることの連絡が入り、各家庭にも旅行費用を抑えることができる旨をお伝えすることができました。担当者の方には、期限の直前まで数々の細かい要望に応えていただきました。

長野県内での旅行計画

長野県内に限定はされたものの、改めて見つめ直すことで長野県の広さに気づかされました。北信や南信地域に希望は集中したものの、それぞれの地域に目的に応じた訪問施設が数多くあり、クラス同士による訪問先の競合はほとんどありませんでした。生徒たちも、これまで訪れた経験の無い候補地が多く存在したようで、クラス内で意見が分散することも多かったように感じるほどでした。また、修学旅行の計画の中で重視していたのが「学習的要素」となります。目的地の候補先でありましたシンガポールや沖縄でも「平和学習」をテーマに準備を進めていました。幸いにも、長野県には松代大本営という素晴らしい見学施設が存在しており、他の候補地にも劣らない環境を生徒たちに提案できるのも大きな魅力の一つでした。その他の「学習的要素」では、異国の文化に触れることはできないものの、これから生徒たちが迎える様々な会食の場で活かせるように「テーブルマナー」を取り入れることにしました。このように、長野県内でも十分魅力的な修学旅行を計画することができました。



松代大本営

松代大本営とは、アジア太平洋戦争の末期に、敗戦色の濃くなった日本が本土決戦に備え東京にあった大本営（日本軍の最高司令部のこと）を長野県の松代に移転しようとして計画し、大地下壕を掘ったものです。今回の修学旅行において「平和学習」を目的に全てのクラスで訪れた見学地となります。生徒たちは、松代大本営の事前学習に取り組んだうえでの見学となりました。現地では、ボランティアガイドの方から丁寧に説明をしていただきました。実際に地下壕に入り、数々の遺物を目の当たりにしながら、当時の状況を振り返りました。ガイドの方から、地下壕工事の犠牲になった人々の話や、この工事の裏で当時の沖縄では多くの島民が戦争の犠牲になっていたなど、現在の日本では想像もできないようなお話をたくさんお聞きすることができました。

テーブルマナー

長野市のホテルメルパルク長野様と藤屋御本陣様に分かれて、テーブルマナーを体験しました。最初に、テーブルマナーの基本的な講義を受け、実際に出てくるお料理に対し、教えていただいたマナーに気をつけながらナイフやフォークなどを使用して食事をしました。前菜・スープ・お魚料理・お肉料理・デザートまで、

講師の方から楽しく丁寧に解説していただきました。大きいテーブルに普段よりも少ない人数で座席を用意してくださり、ソーシャルディスタンスを保ちながら生徒たちも食事を楽しんでいました。これから、このような会食の場を経験する機会が増えていく生徒たちにとって良い経験になったと思います。

その他の目的地

今回のクラス別による行程は、生徒たちの意見も広く取り入れることにしました。結果として現地で体を動かすような体験型の取り組みが多く、コロナウィルスの影響により様々な制限を強いられた、生徒たちの率直な声を聴くことができたように感じます。アスレチック・ラフティング・マウンテンバイク・ツリークライミングなど、自然の中で体を動かしている様子は、日頃なかなか目にすることができない光景でした。近年、スマートフォンの普及により、生徒たちがスマートフォンに関わる時間が年々増えているように感じます。確かに、便利で魅力的なツールが数多く搭載されているものですが、スマートフォンから離れた環境で楽しむことができたのは、良い機会だったように思います。また、外で食べるバーベキューも随分と楽しそうな様子でした。年度当初に予定されていた強歩大会が中止となり、そこで経験するはずでしたクラスでのバーベキューがこのタイミングでその機会を得ることができました。このバーベキューで、クラス内の親交が一気に深くなったと感じるクラスも多かったように感じます。

まとめ

新聞の記事によりますと、県内の高等学校では4割近くの学校において修学旅行を中止とする判断に至ったようです。どの学校においても判断に至るまでの過程で大変苦慮したことと思います。本校でも、実施時期が数週間ずれていたら、中止にせざるを得ない局面を迎えていたかもしれません。同世代には、修学旅行の実施が叶わなかった人たちが存在します。どのような判断が正解か不正解かは分かりませんが、この修学旅行での経験は、生徒たちに限らず学校という立場においても今後に活かしていく必要があると強く感じます。私個人としては、このようなタイミングで修学旅行係を任せていただいたことにより、立場の異なる多方面での考えをお聴きすることができました。現在、修学旅行に限らず、学校の様々な行事において実施の有無から検討していくことばかりです。過去に例を見ないような事態が続いており、現時点での見通しはお世辞にも明るいとは言えません。その中で判断をすることは容易ではありませんが、何事も判断する前から是非を問うのではなく、時には、判断したことが正しい方向へ向かうよう行動面でカバーをしていく必要があるのではと考えるようになりました。「大変な時代を乗り越えてきた世代」。そんな言葉が、いつか生徒たちにとって強い武器となるような時代が来ることに期待したいと思います。来年度は、事態が好転し予定通りの修学旅行ができるよう祈願を込め、まとめとさせていただきます。

校外学習

コロナ禍における一学年校外学習の試み
～身近な地域に目を向けて～

一学年校外学習係　白井道彦

○一学年校外学習におけるコロナウィルス感染防止対策

コロナ禍の中においても、学校行事は日々の教育活動に活力をもたらすので重要と考え、学年会で協議、次の①～③の対策をして、実施した。

①行先は県内を原則とする。

②高速道路の利用を必要最低限とし、高速道路ではトイレ休憩での降車人数も最小限とする。またサービスエリアでは飲食を行わず、飲食物の購入も行わない。

③昼食会場は、本校生徒のみの利用し、ゆとりのあるスペースを利用する。

また、参加についてプリントを通して保護者への説明を十分に行い、参加の場合は「承諾書」を各家庭よりいただくこととした。そして実施日、参加生徒に発熱や咳、体調不良がある場合は、参加をご遠慮願うこととした。

北八ヶ岳ロープウェイ山頂駅付近で（１年２組）

○各クラスの行先

一組　安曇野市内体験学習・黒部ダム他（8：00発17：00着予定）
二組　北八ヶ岳ロープウェイ・陶芸体験他（8：30発17：30着予定）
三組　黒部ダム・安曇野市内体験学習他（8：00発17：00着予定）
四組　白馬ジャンプ競技場・松本市内自由散策他（8：15発16：10着予定）
五組　北八ヶ岳ロープウェイ・発酵パーク他（8：30発16：30着予定）
六組　八ヶ岳アドベンチャーツアー・陶芸体験他（9：00発17：00着予定）
七・八組　上高地（8：30発17：00着予定）

○実施の様子

筆者が引率補助をした二組を中心に書きたい。当日、バスの車内ではもちろんその他も指示のない限りマスク着用だった。乗車ごとにバスの運転手さんは、手指消毒の手配をしてくれた。また、白樺湖の食事会場では、ソーシャルディスタンスに基づき会場の準備がなされていた。生徒たちは「新たなる日常」の中で、マスクを着用し手指消毒も昼食も指示に従って行っていた。そのような状況の中でも、蓼科山山麓、白樺湖畔での散策や食事、陶芸体験の中で笑みがこぼれ、時として真剣なまなざしになり、日常生活では見られない、充実した時間を過ごせていたようである。昼食時で一緒になった六組が白樺湖畔の歩道橋の上で一列になり手をつなぎ一斉にジャンプするところを、担任の正村真一先生が、何度も何度も写真を撮っている姿が印象的であった。

白樺湖の歩道橋で（１年６組）

○実施をして

蓼科山は本校からも天気が良ければよく見える近い場所である。北八ヶ岳ロープウェイの山頂駅を下りれば、標高二、二三七ｍで、溶岩台地が広がり高山の美しさを満喫でき、近くは八ヶ岳の山々を遠くは北アルプスの山々を一望できた。山麓は、別荘地と高原野菜の畑。白樺湖では六組が十一月にも関わらずカヤックに乗ったとのことである。陶芸体験では、蓼科山でとれた粘土が使用されていた。今回は行かなかったが、近くには国宝土偶で有名な「尖石縄文考古館」があり、あたり一帯は、長野県の石「黒曜石」の一大産地である。

「コロナ禍にならなければ、来なかった身近な場所。新たな日常の中で、教育現場でも否応なく変化が求められているが、今後の教育活動の展開について考えるきっかけになった」ということが白樺湖での昼食中、二・六組の引率者四人の話題に上っていた。

カヤックを楽しむ

コロナ禍を利用した校外学習

三学年校外学習係　森　下　　暁

コロナウイルスの感染の拡大を受けて、今年度は課外活動が大きく制限された年であった。その中で、校外学習においても、その実施の是非が問われるものとなった。しかし、三学年としては、「社会の現状を直接目にすることも来年度に次のステージへと移る高校三年生には取ってはかけがえのない経験となる」と考え、実施の方向で企画を検討することとなった。

例年は、県外の観光地においての学習がメインであるが、今年はそのような企画は作ることができない。しかし、その制約を逆に利用し、生徒の目を県内に向けさせることにした。そして長野県内の魅力を再発見すること、また、現在コロナウイルスによる社会的損害を最も受けているともいえる観光業の現状を知ることを目的とした校外学習とした。その目的を達成するために、生徒には次のことを課題として提案した。

①観光地でのインタビューを実施すること。
②インタビューの内容をレポートとしてまとめること。

①については、ただ観光地を見学するだけではなく、コロナウイルスの感染拡大において、実社会にどういった影響が出ているかを、実際の声を聴くことで、どこか他人事にとらえがちな被害にしっかりと向き合うことをねらいとして設定した。各クラス六～八名の班を作り、班ごとに取材先を決定しインタビューを実施した。取材先にはあらかじめアポイントを取ってからうかがうように指示を出した。その時に、快諾してくれた商業施設もあれば、感染拡大を懸念してか断られる施設もあったようだ。しかし、そういった各施設で反応が異なることも、コロナウイルスに関する評価が社会の中で定まっていないことを実感することのできる良い機会であったといえる。取材した内容も、「経営が厳しくて店を閉めなければいけない」と話してくれたところもあれば「GOTOトラベルを利用しながらなんとか乗り切っている。利用者は減っているが何とか乗り越えていきたい」と、前向きな話をしてくれるところもあった。現実の厳しさを学んだ班もあれば、その厳しさに向き合い何とか乗り越えようとしている社会の強さに触れることができた班もあった。

校外学習新聞
2020年11月30日(月)
発行
上田西高校
3年 7組
1班
取材
石岡 亜美 佐藤 実
酒井 日菜 鈴木 早紀
塩入 長谷川 花
西澤 彩花 櫛澤 拓海

信州渋温泉コロナの影響
周辺の店に取材
土産物屋店 若葉屋の現状

事後レポートの例

②の目的を設定した理由は、二つある。一つは、できるだけ幅広い視点で社会を見る力を付けたいという理由である。それぞれの班での取材場所は一つである。そのため取材しても社会の現状を一面しか見ることができないといえる。他の班のレポートをみることで、自分たちが学んできたことが、社会の一側面であることに気づき、社会の多様な側面に触れることができるからである。もう一つの理由は、新しい学力観の一つである、「思考力・判断力・表現力等の能力」の育成につながるからである。特に高校生は自分の学習内容を表現する機会が少なく、その力が育ちにくいといえる。そのため、このような機会を利用しその地下の育成につなげたいと考えてからである。

このように、今年の校外学習では、コロナ禍で様々な制約があることを利用し学習課題を設定した。その結果，普段あまり意識をすることのない社会の現状に目を向けることができたと考えている。三年生は四月から社会に出ていく学年ともいえる。また、18歳選挙権が実施されて久しい現代においては、社会の実情に目を向けなければいけない年齢であるともいえる。その意味では、今回の取り組みは社会の実情に目を向け、それを学習につなげることができた取り組みであったと考えている。

観光地でインタビューしている様子

西高生の活躍

運動部	県大会以上の主な成績		
クラブ名	大会正式名称（カッコ内略称）	結果（団体）	結果（個人）
硬式野球部	2020 年度夏季高等学校野球長野県大会	ベスト 4	
	第 143 回秋季北信越地区高等学校野球長野県大会	準優勝	
	第 143 回秋季北信越地区高等学校野球大会	準優勝	
サッカー部 男子	高円宮杯 U18 リーグ長野県 1 部	第 5 位	
	高円宮杯 U18 リーグ長野県 2 部グループ B	第 3 位	
	高円宮杯 U18 リーグ長野県 3 部グループ A	第 2 位	
	第 99 回全国高等学校サッカー選手権長野県大会	準優勝	
	長野県高等学校新人体育大会	ベスト 8	
サッカー部 女子	第 29 回全日本高等学校女子サッカー選手権大会長野県大会	出場	
	長野県高校女子サッカーリーグ	第 2 位	
	第 15 回長野県秋季新人高等学校女子サッカー大会	第 6 位	
男子バスケットボール部	第 73 回　全国高等学校バスケットボール選手権大会長野県予選会	ベスト 8	
	第 70 回　長野県高等学校新人体育大会	ベスト 16	
女子バスケットボール部	第 70 回　長野県高等学校新人体育大会	出場	
男子バレー部	長野県高等学校新人体育大会バレーボール競技大会	ベスト 16	
女子バレー部	長野県高等学校新人体育大会バレーボール競技大会	ベスト 16	
	第 73 回全日本バレーボール高等学校選手権大会第 1 ラウンド	ベスト 8	
	第 73 回全日本バレーボール高等学校選手権大会ファイナルラウンド	出場	
卓球部	長野県高等学校新人体育大会　卓球競技会	男子　3 位	男子シングルス : 須田大雅　ベスト 8 小泉練　ベスト 16
	全日本ジュニア卓球選手権長野県予選会		男子シングルス 須田大雅・小泉練　ベスト 16
硬式テニス部 男子	令和 2 年度長野県高等学校新人体育大会テニス競技大会	ベスト 8	
	2020 全日本ジュニア選抜室内テニス選手権大会長野県予選		シングルス 松岡歩夢　初戦敗退
	令和 2 年度長野県高等学校新人テニス選手権大会		A 級シングルス 松岡歩夢　初戦敗退　　宮尾航平　初戦敗退 A 級ダブルス 松岡歩夢・宮尾航平　初戦敗退
硬式テニス部 女子	2020 年度（第 75 回）国民体育大会テニス競技長野県大会（少年）		シングルス 黒岩凛　初戦敗退
	令和 2 年度長野県高等学校新人体育大会テニス競技大会 （兼　第 43 回全国選抜高校テニス大会長野県大会）	出場	
	令和 2 年度長野県高等学校新人テニス選手権大会		女子 A 級シングルス 甘利怜佳　初戦敗退
剣道部	令和 2 年度長野県高等学校新人体育大会剣道大会	男子　ベスト 16 女子　6 位	男子　五十嵐実玖琉　3 位 関大和　1 回戦敗退
陸上部	全国高等学校陸上競技大会 2020		5000m 競歩 32 位　田口紫音
	長野県高等学校新人陸上競技対抗選手権大会		5000m 優勝　花岡寿哉　　1500m3 位 花岡寿哉　　5000m4 位　武田寧登 3000m 障害　益山颯流　　5000m 競歩 田口紫音
	長野県高校駅伝大会	男子 4 位	
レスリング部	全国選抜代替大会	2 回戦敗退	
	長野県高等学校新人体育大会レスリング競技大会	優勝	51kg 級①高野航成　55kg 級①井上雄星 60kg 級①坂木颯来　65kg 級①白鳥夏希 71kg 級①遠藤勇馬　80kg 級①尾沼翔太 92kg 級①三井正信　125kg 級②若林武
	全国高等学校選抜レスリング北信越大会	優勝	51kg 級①高野航成　65kg 級①白鳥夏希 80kg 級①尾沼翔太　92kg 級①三井正信 71kg 級②遠藤勇馬 55kg 級③井上雄星 60kg 級③坂木颯来

アーチェリー部	長野県高等学校新人体育大会		女子 70m　②梅原優佳 男子 30m　①柳橋克哉
ハンドボール部	長野県高等学校新人大会　ハンドボール競技大会	ベスト 8	
軟式野球部	2020 年度夏季高等学校軟式野球長野県大会	優勝	
	第 112 回長野県高等学校軟式野球大会 （秋季県大会）	第 3 位	
	第 26 回北信越地区高等学校軟式野球大会（秋季北信越大会）	出場	
スキー部	第 73 回長野県高等学校スキー競技会		男子回転種目　桑原太陽２位　　今井勢弥３位
	第 70 回全国高等学校スキー大会		男子回転種目　今井勢弥６位　　桑原太陽７位
フットサル部	2020 第 7 回長野県 U18 フットサルリーグ	3 位	
吹奏楽部	長野県マーチングフェスティバル	参加	
	第 8 回佐久平マーチングバンド発表会 2020（長野県大会代替大会）	参加	
	県高等学校吹奏楽フェスティバル出演	参加	
華道部	第 4 回長野地区・学生いけばな競技会		準優秀賞　2-7　坂口優 佳作　2-1　鈴木陽世里
美術部	第 42 回長野県高等学校美術展		2-2 坂口亜朱沙、2-4 鹿川紗良、1-6 藤沢菜奈　県展選抜展示
	真田神社巨大絵馬奉納（60 周年記念）		●デザイン・主制作 :2-2 坂口亜朱沙
書道部	第 35 回長野県高等学校書道展		部員 11 名出品展示
	「2020 書の大東」紙上展		ベスト 30 受賞下村あやな 他部員 10 名出品
ECC 部	長野県高校生英語キャンプ及びプレゼンテーションコンテスト		
放送委員会	TSB 杯高校新人放送コンテスト		1-1（アナウンス部門）宮坂乃愛 1-4（朗読部門）中澤凛奈
国語科	うえだ七夕文学賞（俳句）		優秀賞　柳沢　梨歩 ひまわりと手と足伸ばし背比べ
			優秀賞　小柳　美月 ありがとうその一言が青春だ
			入選　梅田　美優 満開に夜空に輝け夏の花
			入選　小林　海琉 サッカーや汗が描いた夏休み
			入選　三井　志歩 あの夕日グラス透かして味わいたい
			入選　長縄　奏哉 夏休みコロナに負けるな大花火
			入選　横山　愛花 夏蛍地上の星があちこちへ
			入選　神林　愛乃 君だけに毎日甘える電話越し
			入選　樋口　茉莉 パチパチと淡く散りゆく星花火
			入選　宮原　健 部活終わり炭酸を飲む夜の駅
			入選　石坂　直大 ほうせん花はじけて未来へ命継ぎ
			入選　小林　千尋 自粛して家族の仲が深まった
	うえだ七夕文学賞（短歌）		入選　三井　志歩 青い稲日光浴びて背を伸ばし水辺は虫の水泳大会
			入選　東　拓未 風に乗りふわり香るは沈丁花姿なくても心癒やされ
			入選　岡本　響 眠い目と重たい荷物キツイけど我慢の先に広がるパノラマ
			入選　中村　美優 雲裏で輝きほこる天の川僕らに見えぬ二人の世界
理科	令和２年度課題研究合同研修会兼全国高等学校総合文化祭県予選		千曲川水質調査　齋藤遼、中澤莉子、町田百穂、小林芹菜、久保山楓菜
アーティスティックスイミング	日本選手権水泳競技大会		テクニカルルーティンデュエット優勝 和田彩未

野球部の活躍

硬式野球部監督　吉﨑　琢朗

本当に生徒に勇気づけられた一年でした。本年度の硬式野球部の活動において以下の三つの出来事が振り返りのこととしてあげられます。新型コロナウィルス感染拡大における活動自粛・夏の代替大会・新チームの秋季大会での躍進であります。

三月二日。長く厳しい冬の鍛錬期を終え、対外試合をする矢先の出来事でした。新型コロナの影響により活動を自粛せざる得なくなりました。最初は一週間くらいで収まると思っていたことが結局、活動再開が六月一日。途中には選手たちが最大の目標としていた甲子園の中止という現実をも受け入れなければならない状況となってしまったのです。これまで彼らと付き合ってきた私もいたたまれない気持ちになりました。もちろん選手たちは目標の大部分を失い、落ち込み、気持ちのやり場のない状況になりました。けれど三年生が中心となり高校野球を途中で投げ出すことはありませんでした。自粛期間は各自の自覚を養い行動し、今まで発想もつかなかった取り組みをも残してくれました。オンラインを活用したミーティング・練習動画、自粛期間のモチベーションビデオ、そして何より高校野球への熱い思い。「次の何かのために」最高の準備をしてくれました。こうして夏の代替大会が決定した時、彼らの目標は甲子園ではなく高校野球で培ってきたすべてを発揮し、最強で最高のチームとしてやり遂げることでした。代替大会・準々決勝・対松商学園戦、今までの成果が形となる一戦でした。序盤、相手先発エースの好投、本塁打による失点、二点を先に許す展開となった。何とか追い上げるべく一点を取ったものの、連日の登板にもかかわらず力投を続ける相手投手に九回まで打ちあえぐ状況となった。九回最後の攻撃、何とか塁を埋めチャンスで三番バッターの高寺。強烈な打球を飛ばしたもののゲッツー。ツーアウト二塁の土壇場の状況に追い込まれた。しかしながら、打席には好機で力を発揮する打者四番の清水。まさにあきらめない気持ちと反応で打った一打だった。起死回生の同点の一打。延長十回にはエース阿部の気迫のヘッドスライディング、そして満塁から努力の選手、中村のサヨナラとなる犠牲フライ。まさに応援していただいたすべての方への感謝を表す試合となった。惜しくも準決勝では飯山高校に敗戦。残念ながら目標としていた三年生での代替大会優勝は達成できなかったものの上田西高校野球部として成績以上のものを残してくれました。第一に三年生が途中何度もくじけそうになったにもかかわらず全員がやり遂げたことあると思います。仲間の大切さ、思いやりそして支えてくれた方々への感謝を口にできる三年生でした。この勝利以上にかえがたいことは後輩の志へと間違いなく引き継がれていくことでしょう。また初めて監督をやらせてもらい、私の頭の中を理解しようとしてくれた三年生。本当に皆さんが監督として最初の選手たちで良かったと思っています。ありがとう。皆さんもこれからが本当の人生の中での勝負時です。野球部で培ったことをこれからの芯の強さに生かしてください。

さて三年生の姿を目にしてきた後輩たちは志半ばの所にいます。新チームでの秋季大会では勢いにのることができ北信越大会準優勝となりました。この先のチームの成長・躍進に期待していくこととなるでしょう。

最後に本年の野球部における活動、活躍は数々の伝統の重みを感じる一年となりました。新型コロナウィルスの拡大により、高校野球または甲子園というものの価値を問う一年でした。見えない敵との戦いによって奪われてしまった目標。甲子園と高校野球がいかに選手や取り巻く人々へ重く影響をあたえつづけてきたものなのか。これから先どこまでこの状況が続くのか。いつかは必ず清々しい気持ちで白球（目標を）追いかけたいものです。また本校の野球部の歴史、重みをさらに肌で感じることとなりました。本校創設六十周年を記念に花を添えるとともに新たなる上田西高校野球部としての扉を開き、記憶し続けるこの先となるよう努めていきたいと思います。

自粛の中でのボランティア活動

ＪＲＣ部顧問　山　浦　さゆり

新型コロナウイルスの流行により、目に見えないウイルスとの戦いは、すべての活動を失ったかのように、ＪＲＣ部にも制限がかかってしまいました。

始まりはスプリングチャレンジボランティアです。今年は春休み中にＪＲＣ部をはじめ、有志希望者による、デイサービスセンターなど各福祉施設や児童センターでのふれあい体験ボランティアが中止となってしまい、春休みを利用して市の体験ができなくなってしまいました。

四月になり、どんな体験ができるか、考えていたところに、1年生の生徒、保護者から、「休校の間の時間を利用してマスクを手作りしている」。と声を掛けてくださり、マスクづくりに挑戦してみることになりました。この時期は、色んな方々がマスク作りを始めたせいか、マスクの材料もなかなか手に入らず、素人の手作りなので、衛生面も考慮しながらの、活動となりました。

ゴム紐が手に入りづらく毛糸を使って、ゴム状に編んだりと工夫し、完成しました。

本格的に学校が始まり、コロナ禍でできるボランティア活動はないのか、社会福祉協議会の方々に相談し、校内でできることはないのか…皆で考えました。

手作りマスク

四月末にボランティアセンターにお届けしました

① メッセージカード作り（施設へのふれあいカード作り）

② 収集活動（マスク、古切手、固形石鹸、歯ブラシ）

③ 募金活動（医療従事者への募金、赤い羽根共同募金、チョコ募金）

④ 手作り活動（しおり作り、楊枝入れ作り、マスク作り）

この四項目を実施することとなりました。

【おうちでボランティア】

メッセージカード作り

製作の際『私自身もコロナウイルスの影響で気分が沈んでいたので、心温かくなるようなメッセージカードを作成して、共有することで、少しでもあたたかな気持ちになって、もらえたら』『施設利用者だけでなく、医療従事者の皆さんも、予防で大変な時なので少しでも朗らかな気持ちになって、過ごしてほしい。』そんな思いでカードを作り、社会福祉協議会を通じて、サンパレス常磐城様に届けてもらいました。

また、季節のプレゼントでは、十二月にクリスマスカードを作成しお届けしました。

収集活動では、マスク、古切手は社会福祉協議会へ、固形石鹸、歯ブラシは、ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアへの活動に、役立ててもらうために、集め、お渡し

しました。

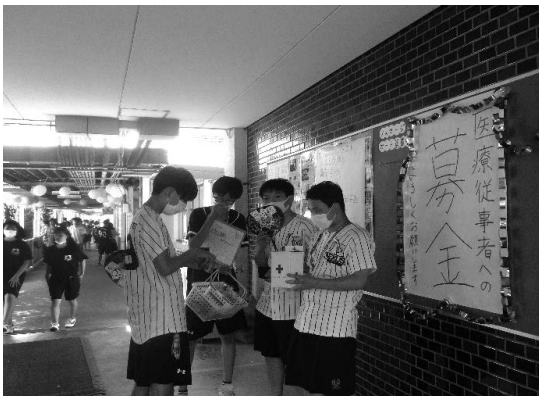
募金活動では、西高祭で生徒会と協力し、医療従事者への感謝、応援という趣旨で活動し、上田市にお渡ししました。今年は、校内祭でしたが、皆さんにご協力いただき、大変ありがたかったです。

秋には、赤い羽根共同募金ということで、「たすけあいの心」を育む福祉教育の一環として、地域や人とのつながりを絶やさないために、活動しました。

冬には、JIM - NETチョコレート募金です。こちらは、イラクにおける小児がんの医療支援や難民支援を行っており、日本とは離れた地において苦しむ人や、その問題を知ることで、国を超えた支援の在り方を学びます。また、東日本大震災後に福島原発の事故における支援も行っております。その支援報告を通して、震災ボランティアについても学んでいます。

今年は、コロナウイルスの関係で、チョコの袋詰めのボランティア活動が中止になったため、購入での募金となりました。

この一年、人との触れ合いは、制限されてしまいましたが、社会福祉協議会でも、上田城のごみ拾いや、古切手の整理、シトラスリボンプロジェクトなど少しでも役立つことを計画くださり、参加することができました。



西高祭募金活動のＪＲＣ部員

赤い羽根共同募金活動　　ＪＲＣ部員

自粛の中で少しでも、心が和み朗らかになれるような活動を考え、地域の力となれたらと思います。今後もしばらくふれあい活動は、厳しい状態なのかもしれませんが、やらされてではなく、主体的な活動を続けていきたいと思います。

「シトラスリボンづくり」 思いやりを持ちコロナ差別をなくそう

卓球部の活動

卓球部顧問　村上　海

私が西高に赴任して五年が経ちました。西高を卒業した私にとって、母校の卓球部に戻って指導ができることは大きな喜びでもあります。西高卓球部は私の高校生活そのものでした。多くのことを経験させてもらいましたし、自分の人生を決めるきっかけにもなりました。高校を卒業し、念願の教員になった後、声をかけていただいたのも、縁があってのことだと思います。

西高卓球部は、全ての人から応援されるチームを目指し日々練習に励んでいます。ただ技術を伸ばすだけではなく、社会に出ても恥ずかしくないような立派な人になれるよう指導しています。時間を守る、挨拶をする、身の回りの整理整頓をする、そして全ての人に感謝する、これらを徹底させることで、引退する頃には見違えるように成長してくれています。入学時には幼かった子どもたちも、先輩になり率先して後輩に指導している姿を見せてくれます。この時、子どもたちの成長を感じ、喜びを感じることができます。

大会の結果だけを見ると、素晴らしい記録を出し続けています。個人戦での全国選抜大会への出場をはじめ、新人戦県大会男子団体戦では、二年連続三位となり、北信越大会へ出場することができました。しかし、ここまでのチームを作り上げるのは簡単なことではありませんでした。私自身、小学校から始めた卓球も今年で二十年になります。大学でも本格的に続け、コーチ等を経て現在に至ります。赴任して一年目は、子どもたちもやる気があり、指導に飢えていた子が多かったため、厳しい指導にもついてきてくれました。その先輩たちの活躍もあり、卓球をやりたいから西高に来たいという子も増えてきたのも事実です。はじめは部員が少ない状況でしたが、人数も増え少しずつ部としての形が出来上がってきたことを覚えています。

今でこそ東信大会男子団体戦４季連続優勝、個人戦優勝等の記録は出ていますが、最初の団体戦優勝までは三年かかり、とても苦労したことを今でも覚えています。子どもたちに優勝を味わわせてあげたい、努力が報われてほしい、様々な気持ちがありましたが、結果はすぐ出ません。指導方法を考え直し、練習メニューを変える等試行錯誤が続きました。厳しい言葉をかける時も多くありました。

そのような中、結果を出すための指導が見つかりました。それは、卓球を楽しませるということです。それまでは結果にこだわり、子どもたちに厳しい指導を続けてきました。しかし、ただ厳しいだけでは萎縮してしまい、大事な一本を取ることができないということに気づいたのです。ある程度の型にはめた指導はしますが、子どもたちがやりたいようにやらせることで、伸び伸びと試合ができるようになりました。結果もついて来ることで子どもたちのモチベーションもあがり、さらに強くなろうとします。次の目標は北信越大会で勝つことです。チーム一丸となって努力していきます。

今年度も県大会で三位になり、北信越大会への出場権を手に入れましたが、これは現在の三年生の力が大きいと感じています。前代未聞の新型コロナウィルス流行によりインターハイが中止となり、三年生の活躍の場が失われてしまいました。新年度を迎える直前の三月には、部としての活動もし辛くなりました。大会が中止になることを伝える時はとても心苦しかったのを今でも鮮明に覚えています。「どんな形でもいい、僕たちは西高卓球部を引退できればそれでいいです。」この言葉を今でも忘れることができません。コロナで学んだ教訓があります。それは「次頑張ればいいは通用しない」ということです。次の大会で勝てばいいやと思っても、次の大会があるかどうかわからないという状況が生まれてしまいました。三年生が悔しい思いをした分、後輩たちにはこの気持ちを絶対に忘れずに、日々活動してもらいたいと思います。そして、今練習ができること、大会に参加できること、応援してくれる人や活動に理解をしてくれる人がいること、全てに感謝し活動していきたいと思います。

紆余曲折あり、良いことも悪いこともあるのが西高卓球部です。子どもたちの大事な三年間に携われることに感謝し、大きく成長させたいと思います。また、全ての人に応援されるようなチームにできるよう、努力を続けます。

初担任を終えて

三年二組担任　土屋　正明

十一年前に上田西高校を卒業し、教員として再び戻ることができたこと自体が感謝しかありませんでしたが、勤務三年目にして担任を持たせていただいたことも私にとって非常に嬉しいことでした。そして、あっという間に三年の月日が流れ、こうして三年二組の生徒三十九名を送り出せたのは在学時代からお世話になっていた方も含め、多くの先生方のおかげです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一年次では前年度の三月から準備を進めていましたが、頭の中は混乱していました。私自身、準備をどこからどこまで行えばいいのかが分からず、入学式当日も他のクラスより二十分以上説明に時間がかかってしまい、早速迷惑をかけてしまいました。これから始まる前途多難な生活の前触れのようで、正直不安で仕方なかったです。その後何かあった際は、主任の立堀先生や隣の一年三組の担任である丹羽恵美先生に相談し、何度も助けていただきました。最初の一年間は、いつも落ち着かず、ずっと慌てていた一年間だったと思っています。それでも生徒とのコミュニケーションを重ねていくことで、徐々に慣れていきました。進級に合わせてクラス替えがありましたが、私にとって旧一年二組の生徒は担任として接してくれた最初の生徒であるため、感慨深いものを感じました。生徒も初めてですが、私自身も担任として初めての強歩大会、西高祭、クラスマッチ、校外学習を経て、改めて担任の大変さを感じることができました。しかし、それ以上に生徒とのつながりを密に感じ、担任だからこそ理解できる生徒との関わり方を深く学ぶことができました。ネガティブ思考のため、辛かったことばかりが最初に浮かんでしまいますがその後には、楽しかった思い出も浮かんできてくれるので、充実した一年間を過ごせたと今では思っています。

入学式

一年後、クラス替えによってまた新たな再スタートとなりました。今まで積み上げてきた関係とは別に新しいクラスとなったことで、一年前と同じ不安がありました。周りの先生や旧一年二組の生徒からも二年二組は大変なクラスと言われ、どんなクラスになるのかも想像がつかなくなりました。しかし、共に過ごしていくうちに不安も消えてゆきました。二組の男子はクラスに元気と明るさ、そしてユーモアを与え、女子は真面目さと主体性、そして協調性を与えてくれました。文化祭での模擬店では女子と男子で仕事を大まかに割り振り、当日はバタバタしていましたが、最後までやり抜けたことにホッとしていました。修学旅行では、大きなトラブルもないまま全員が楽しい思い出を作れたようで本当に良かったと思っています。多くの行事を通して、生徒が成長する姿を見られたことが私の二年次での一番価値のある思い出でした。

三年次は、新型コロナウイルスの影響によっていきなり出鼻を挫かれ、通常日程とはまた異なる疲労感が続きました。登校再開となって久しぶりに生徒と対面した際は、嬉しさよりも安堵感の方が強かったです。その後は文化祭やクラスマッチ、校外学習などほぼ全ての行事が縮小してしまいましたが、それでも全力で取り組んでいた様子を見ると、徐々に嬉しさがこみ上がって

西高祭

きました。進路選択にも大きな影響があって将来が不安な中でも、学校生活を一所懸命楽しもうとする二組の生徒たちは強かったです。是非その強い気持ちをこれからも新たなステージで発揮してほしいと思います。

一年次から現在においても未だに教員としては未熟で、考えや態度が固いため、口うるさいことを生徒に何度も言い続けることしかできていません。そのような私でもこうして三年間担任をやり通せた理由は、多くの先生方の支えと二組の生徒に恵まれたことだと思っています。常に慌てて落ち着く暇がなかった一年次から徐々に余裕を持てるようになり、二年次では、落ち着いてきたねと声を掛けていただいたときは非常に嬉しかったです。教員という仕事の中では、担任は特別な役職だと思っています。義務教育ではありませんが、自身が受け持つクラス生徒の未来をサポートし、社会に送り出す責任を持って対応することが何より大変でした。その重みを常に心に秘め、この三年間個人的には生徒に嫌われても構わない心構えで担任業務に奮闘していたつもりです。進路指導をする中で、一人ひとり進路が決まっていく報告を聞いたときに、私は担任という役職の素晴らしさに気づけたと思っています。小学校や中学校と比べて、高校は卒業後、今後の人生に大きく関わる専門的かつより厳しい社会へと進出するため、その手助けができたと考えると、担任を担当して良かったと思っています。これからも教員として生徒の人生のサポートができるよう責任を持って努力していきたいと思います。

令和２年度
上田西高の教育 第65号
令和３年３月３日発行
発行：上田西高等学校
印刷：田口印刷株式会社